

生物多様なごや戦略(H21.9.28 中間案)について

平成21年10月1日

名古屋市経営アドバイザー：小島 敏郎

生物多様なごや戦略(以下「戦略」という。)の構成は、「過去」、「現在」、「展望」という「時間軸」と、「地形」、「生き物」、「暮らし」、「名古屋市以外の地域(外国を含む。)とのつながり」などのテーマ軸とのマトリックスで構成されていると理解する。この構成は、記述がわかりやすく書かれていることと相まって、戦略全体をわかりやすくしている。

これらの時間軸とテーマ軸のマトリックス構成は、「実践」という今後の行動に結びついてこそ「戦略の意味」があり、テーマとして取り上げた項目は「実践編」に取り上げられなければならないし、この観点からのチェックが必要である。

提案1:空間的配置と交通手段

テーマ軸の一つとして、名古屋の地形や土地利用がどのように変化してきたかがある。名古屋の人口が増加するにつれて変化してきた「都市と自然の配置」の変化は、「100年後、50年後の名古屋」についても、空間の配置として示されている。

しかし、都市の活動において、交通手段の変化(人力、車馬、水運、鉄道、自動車)とそれに伴う交通網の変化(道、道路、川・運河、鉄道、自動車道)は、人々の活動形態の変化や人と生態系との関係の変化を分析し、未来を見通すにあたって、不可欠である。ぜひ盛り込んでいただきたい。

提案2:気候変動の影響は不可欠

100年後・50年後の名古屋を想定する際に、気候変動の影響は不可欠である。

現在行われている気候変動交渉は、今世紀末にも世界全体の気温上昇が産業革命から2℃上昇するというターゲットを念頭において行われている。しかし、国際社会の合意が得られ、連帯した温室効果ガス削減行動がとられるかについては、困難を抱えている。

このような状況にかんがみると、将来、ある程度の世界全体における気温上昇は避けられないし、気温や降水パターンも変化し、生物が生息する基礎条件が変化する。現在の気候を前提に、100年後、50年後の名古屋の環境を検討することは、リスクがある。

提案3:名古屋以外の地域に支えられている大都市・なごや

名古屋市の暮らしや経済活動は、名古屋以外の食料・資源やエネルギーによって支えられている。都市は、都市だけで自立できない。そこで、名古屋の現在や将来を考えるにあたって、名古屋以外から得ている自然の恵みを確保するために、いかにしてそれらの自然を保全し、活用するかという視点が、分析編においても、実践編においても不可欠である。

生物多様性に関する企業ガイドラインでは、企業行動に関連するサプライチェーンや廃棄物の処理など、工場や店舗以外の事柄についても配慮することになっており、企業にそれを求めている。その観点からすれば、都市においても、都市内の自然環境の保全・利用や都市機能の整備についてだけでなく、都市活動を成り立たせている「サプライチェーン」や「都市から排出される気体・液体・個体の形態をとる廃棄物」が生物多様性に与えている影響を知り、それらを保全・活用する方策を検討し、行動に移すことは当然である。

2010年10月には、生物多様性条約 COP10に合わせて、「Mayer's Conference」も開催されるが、これまでは、各都市の地域内のことだけであったことから、名古屋では「Bon Call for Action」を一歩進めて、都市を成り立たせている都市以外の地域の生物多様性への配慮を、テーマに加えることを期待したい。

提案4:生物多様性と学術・産業

実践編の「すべてをつなぐ拠点づくり」に関し、生物多様性を保全し、利用するため、市民のセンターだけでなく、大学や研究所などのアカデミックなセクターの積極的な貢献や品種改良技術やバイオテクノロジーなどを活用した農業を含む産業の振興も重要である。

名古屋のモノづくりは、自動車を基本とした産業が隆盛であるが、100年後、50年後を展望して「なごや」を考える際には、生物多様性と学術・産業の観点は外せない。名古屋の産業についても、産業の多様性が地域の強靱性の基本である。

提案5:具体的なプロジェクトの提起

100年・50年後の名古屋のイメージやビジョンづくりについて、変化の時代はトレンドでは見通せないことから、このようなバックキャスト手法は、有意義である。しかしながら、そのビジョンにつながる行動を今から行うという「今、目に見える行動」が欲しい。ぜひ具体的な事業を提案してほしい。

「私たちにできること」は、一人一人の日常活動でもあるが、最も大切な「私たちにできること」は、選挙権の行使により政府や議員を選択することであり、自らが名古屋市の方針を提案し、作り、市役所を使っていくことである。それが、「住民自治」の真髄である。

その観点から、今から行動に移すプロジェクトを提案できれば、100年後・50年後のなごやを更に具体的にイメージできる。例えば、お隣の韓国・ソウルでは、李明博大統領がソウル市長時代に行った「チョンゲチョン」復元事業は、道路を川に戻した良い例であり、任期4年の間に成し遂げたその構想とスピード感には学ぶところが多い。

提案6:100年後・50年後のなごやについて、広範な提案活動を

既に、100年後・50年後のなごやのイメージ・ビジョンづくりに当たっては、市民からの提案が積み重ねられていると考えるが、更に大々的な提案活動を巻き起こし、この生物多様性戦略を市民の成果としてほしい。(以上)